

日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J) 作成の試み

田村 紋女
広島大学

小塩 真司
早稲田大学

田中 圭介
兵庫教育大学

増井 啓太
慶應義塾大学
日本学術振興会

ジョナソン ピーター カール
ウェスタン シドニー大学

Dark Triad (DT) とはマキャベリアニズム, サイコパシー傾向, 自己愛傾向という3つの反社会的なパーソナリティ特性を指す。本研究の目的は, DTを簡便に測定できる Dark Triad Dirty Dozen の日本語版 (DTDD-J) を作成し, 信頼性と妥当性を検討することであった。246名の大学生がDTDD-J, 各DT特性に対応する既存のDT尺度, ビッグファイブ尺度に回答した。確認的因子分析の結果, 各DT特性に対応した3つのグループ因子と総合的なDT特性による1つの一般因子から構成されることが示された。内的信頼性はサイコパシー傾向を除くといずれも高い値が示された。併存的妥当性と弁別的妥当性についても概ね先行研究を支持する結果であった。以上から, DTDD-JはDTを包括的, かつ効率的に測定できる尺度として一定の信頼性と妥当性を持つことが示された。

キーワード: Dark Triad, マキャベリアニズム, サイコパシー傾向, 自己愛傾向, 尺度開発

問 題

近年, 対人関係に問題を抱えやすいパーソナリティとして, Dark Triad (DT) が注目されている (e.g., Paulhus & Williams, 2002)。DTとはマキャベリアニズム, サイコパシー傾向, 自己愛傾向の総称であり, これら3特性は代表的な反社会的なパーソナリティとされる (Paulhus & Williams, 2002)。マキャベリアニズムは他者操作的で搾取的な特性であり (Christie & Geis, 1970), サイコパシー傾向は利己性や希薄な感情を代表とする対人的・感情的側面と衝動性のような行動的側面を持つ特性である (Hare, 2003)。そして, 自己愛傾向は賞賛や注目, 地位や名声を求め, 他者に対して競争的で攻撃的な特性である (Raskin & Hall, 1979)。

DTをはじめとした反社会的なパーソナリティ

は, 主に攻撃行動や非行といった周囲の他者に厄介を与える外在的な問題行動と関連する。このような問題行動は発達過程で生じる不適応行動の1つに分類され, 臨床的に有用な基準として重要視されてきた。例えば, アメリカ精神医学会の『精神疾患の診断・統計マニュアル』では, 少年期の問題行動の有無が反社会性パーソナリティ障害の診断基準に関わる。DTのうち, マキャベリアニズムとサイコパシー傾向は診断可能な精神疾患に含まれないため, これらの傾向が高い人は反社会性パーソナリティ障害と診断されることが多いと考えられている。このように, これまで, DTは犯罪をはじめとする臨床的な問題との関連が指摘されてきた。加えて, 近年では一般人口を対象として, DTと様々な問題行動との関連についての知見も得られている。具体的には, 友人や恋愛関係, 職場など, 様々な対人関係におけるDTの反

社会性が指摘されている (e.g., Jonason, Luevano, & Adams, 2012; O'Boyle, Forsyth, Banks, & McDaniel, 2012)。このような一般人口を対象としたDTに関する研究の蓄積は、DTの臨床的な位置づけを確立させることにつながるだろう。

これまで、DTの3特性はそれぞれ複合的な特徴を持ち、概念の構造も異なるため、独立した特性として区別されてきた。しかし、3特性は不誠実さ、冷酷さ、攻撃性や衝動性の高さといった多くの類似した特徴をもつ (e.g., Furnham, Richards, & Paulhus, 2013)。また、神経科学的な研究では、共感性等の情動処理に関わる前島皮質や、高次な認知機能に関わる前頭前皮質の機能的・構造的な特異性がDTの3特性に共通して認められている (Decety, Chen, Harenski, & Kiehl, 2013; Jankowiak-Siuda & Zajkowski, 2013; Verbeke, Rietdijk, van den Berg, Dietvorst, Worm, & Bagozzi, 2011)。そのため、近年の研究では、3特性をDTという包括的な概念としてとらえようとする知見が得られている。例えば、Jonason & Webster (2010) は、DTの3特性が多くの類似した特徴を持つことから、3特性には潜在的に共通する構造が存在すると予測した。この仮説を検討するために、マキャベリアニズム、サイコパシー傾向、自己愛傾向を測定する既存の3種類の尺度について因子分析を行った。その結果、各特性に対応する3つの因子が抽出され、さらに、その3因子はDTという1つの総合的な因子に集約されることが明らかになった。また、DTの3特性は共通して、性格特性5因子 (ビッグファイブ) の協調性と関連することが示唆されている (Jakobwitz & Egan, 2006)。さらに、DTの3特性はいずれも、短期的で搾取的な対人方略と関連することから、進化論的観点から検討した場合、DTが利益追求や目的達成に応じた社会的方略を選択するという点で適応的である可能性が指摘されている (Jonason, Li, Webster, & Schmitt, 2009)。そして、これらの関連性は、DTの3特性を個別

の特性として扱った場合よりも、包括的な概念として扱ったほうがより顕著となることが明らかとなっている (Jonason et al., 2009)。

このように、DTを包括的な概念として捉えることの重要性が明らかにされてきた一方で、DTの測定に既存の3種類の尺度を用いる手法にはいくつかの制約が残されていた。例えば、これまでのDT尺度では各DT特性の既存の尺度を同時に使用していたため、項目数が90項目を超えていた (e.g., Jonason et al., 2009)。しかし、項目数の多さは評価者に疲労やストレスをもたらすため、回答の欠損や誤答に繋がる恐れがある (Saucier, 1994)。また、多数の項目から構成される尺度は、調査に制約を与えてしまう。このような問題を改善するために、Jonason & Webster (2010) は12項目から構成される簡便なDT尺度として、Dark Triad Dirty Dozen (DTDD) を開発した。DTDDでは、マキャベリアニズム、サイコパシー傾向、自己愛傾向の3つの因子が抽出され、その3因子は1つの高次因子に集約されること、また、各因子は対応する既存のDT尺度との十分な相関を示すことが確認された。さらに、DTDDを用いた場合と既存の各DT特性の尺度を総合した場合とを比較し、DTDDは既存の尺度を合わせた場合と比べても遜色のない信頼性、妥当性を有することが示された。このような研究成果から、DTDDはDTの特徴を包括的に、かつ効率的に測定できる尺度として極めて有用であると考えられる。

現在作成されているDTの尺度のうち、十分な信頼性と妥当性が報告され、一般的に使用されている尺度は少ない。さらに、その中で、3特性に共通した基盤が反映されたDTという1つの総合的な因子を仮定した尺度は他にみられない。以上のことから、DTDDは、DTの3特性を個別に測定する場合と、3特性に共通する特徴によって説明される1つの包括的な概念として測定する場合の双方で有益であり、DTの機能や過程を理解することに貢献すると考えられる。そこで、本研究

では、日本語版DTDD (DTDD-J)を作成し、信頼性と妥当性を検討することを目的とする。まず、DTDD-Jが原版と同様の因子構造となることを確かめるために確認的因子分析を実施する。確認的因子分析では、DTDD-JがDTという総合因子のみで構成される1因子モデル、DTの3因子間に相関を仮定した3因子間相関モデル、第1層にDTの3特性によるグループ因子、第2層にDTという1つの一般因子が仮定される2層の階層因子分析モデル¹⁾を検討し、モデル間の適合度を比較する。このうち、原版のDTDDと同様に、階層因子分析モデルの適合度が最も高いと予測される。

DTDD-Jの信頼性に関しては、DTDD-JについてCronbachの α 係数を算出し、内的整合性を検討する。そして、DTDD-Jの妥当性については、既存の各DT特性の尺度とビッグファイブ尺度を使用して併存的妥当性と弁別的妥当性を検討する。DTDD-Jの下位尺度は既存のDT尺度と正の相関を示し、特に対応する特性の尺度との相関が最も高いと予測される。ビッグファイブ尺度との関連については、DTDD-Jの総合得点およびすべての下位因子はビッグファイブの協調性と負の相関を示すと予想される。協調性を除く他のビッグファイブの因子とDTとの関連は研究によって一貫していないものも多いが、多くの研究で共通する知見として、開放性は自己愛傾向と正の相関を示し、勤勉性はマキャベリアニズムおよびサイコパシー傾向と負の相関を示すことが示唆されている (Jonason & Webster, 2010; Paulhus &

Williams, 2002)。したがって、本研究においても同様の相関関係を得られることが予想される。一方で、信頼性と妥当性を判断するには、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向の類似性に留意する必要がある。現在、最も一般的に用いられているマキャベリアニズム尺度のMachiavellianism Scale IV (Mach-IV; Christie & Geis, 1970)は、サイコパシー傾向の特徴も測定することが可能な尺度とされている (McHoskey, Worzel, & Szyarto, 1998)。一方で、サイコパシー傾向を測定する尺度の1つであるPsychopathic Personality Inventoryの下位尺度にはマキャベリアニズム的側面も存在する (Lilienfeld & Andrews, 1996)。また、サイコパシー傾向の因子構造については現在も議論が続いており、原版でサイコパシー傾向の併存的妥当性を求めるために使用された尺度と本研究で用いるLevenson Self-Report Psychopathy Scale (LSRP; Levenson, Kiehl, & Fitzpatrick, 1995)は想定している因子構造が異なる。LSRPは2つの因子からサイコパシー傾向をとらえようとする尺度であるが、第2因子の弁別性が低いという制約があるため、原版よりもDTDD-Jのマキャベリアニズムとの相関が高いと想定される。そこで、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向の弁別的妥当性を判断するために、ビッグファイブ尺度との関係性に注目する。これまで、神経症傾向はマキャベリアニズムとは正の相関 (Vernon, Villani, Vickers, & Harris, 2008)、サイコパシー傾向とは負の相関 (Paulhus & Williams, 2002)を示すことが見出されている。そのため、本研究でも同様の相関関係を得られることが予想される。このように、DTDD-Jとビッグファイブ尺度の神経症傾向との関連から、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向の弁別的妥当性を検討する。

DTDD-Jにおける信頼性と妥当性の検討に加えて、DTの性別による得点の差についても確認する。原版では、DTの特徴は女性よりも男性の方

1) 本論文では、Jonason & Webster (2010)の原版と同様に、1因子モデル、3因子間相関モデル、2層の階層因子分析モデルについて検討した。Dark Triadを3因子の上位に置く高次因子分析モデルを考慮することも可能であるが、3因子の上位に2次因子を置いたモデルは3因子間相関モデルと適合度が等しく比較することができない。そこで、本論文では高次因子分析モデルではなく階層因子分析モデルを採用した。

が顕著に現れることが確認されている (Jonason & Webster, 2010)。そのため、DTDD-Jのすべての得点で、男性は女性よりも高い得点を示すと予想される。

方 法

調査対象者

本研究の全調査対象者は、東京都の大学生246名(男性83名, 女性157名, 不明者6名)で、平均年齢は21.0 ($SD=4.5$) 歳であった。全調査対象者246名のうち、221名はすべての自己記入式尺度に回答し、25名はTIPI-Jを除くその他の自己記入式尺度に回答した。

調査内容

日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J)
 原著者の許可を得たうえで、Jonason & Webster (2010) が作成したDTDDを日本語化した。日本語版作成の際には、原版の直訳ではなく、原版の訳語の範囲内で日本語としてDTの特性を反映させることを考慮しながら訳出を行った。DTDD-Jの項目内容を決定するために、3回にわたる予備調査を実施した。予備調査では、各項目が極端に偏った得点分布を示さないこと、重複する特徴を持つDTの各特性を的確に3因子に弁別することに留意し、日本語表現の推敲を繰り返した。最終的な日本語表現が確定したところでバックトランスレーションを行い、原著者が内容を確認した。その結果、原著者から原版の項目と日本語版の項目が対応していることの確認が得られた。DTDD-Jは原版と同様に、DTの各特性について4項目ずつの計12項目で構成された。DTDD原版では、マキャベリアニズムが項目1から項目4、サイコパシー傾向が項目5から項目8、自己愛傾向が項目9から項目12の順番で提示されているが、原著者と協議したうえで、項目の提示順序を同じ下位尺度の項目が連続しないように変更した²⁾。原版と同様に、「1. 全くあてはまらない」と「5. 非常にあてはまる」を表記し、それ以外

の選択肢については数字のみで表記し、5件法で回答を求めた (Appendix 2 参照)。

Mach-IV DTDD-Jの併存的妥当性を検討するために、Christie & Geis (1970) が作成したMach-IVの日本語版(中村・平石・小田・齋藤・坂口・五百部・清成・武田・長谷川, 2012)を使用した。20項目の1因子で構成される。「1. 全くそう思わない」から「7. 全くその通りだと思う」までの7件法で回答が求められた。本研究における内的整合性は $\alpha=.73$ であった。

LSRP DTDD-Jの併存的妥当性を検討するために、健常者のサイコパシー傾向を測定するための尺度であるLSRP (Levenson et al., 1995) の日本語版(杉浦・佐藤, 2005; 大隅・金山・杉浦・大平, 2007)を使用した。この尺度は、対人的・感情的な問題の特徴とする一次性サイコパシーと、行動的な問題の特徴とする二次性サイコパシーの2つの下位因子を持つ。一次性サイコパシーは16項目、二次性サイコパシーは10項目で構成される。「1. 非常に当てはまらない」から「4. 非常に当てはまる」までの4件法で回答が求められた。本研究における内的整合性は以下の通りであった： $\alpha=.78$ (LSRP 総合得点), $\alpha=.79$ (一次性サイコパシー), $\alpha=.54$ (二次性サイコパシー)。

Narcissistic Personality Inventory-Short Version (NPI-S) DTDD-Jの併存的妥当性を検討するために、自己愛傾向を測定するNarcissistic Personality Inventory (NPI; Raskin & Hall, 1979) の短縮日本語版(小塩, 1999)を使用した。下位

2) DTDDにおける項目の対応関係は以下の通りである(マキャベリアニズム: 原版項目1→日本語版項目1, 原版項目2→日本語版項目4, 原版項目3→日本語版項目7, 原版項目4→日本語版項目10, サイコパシー傾向: 原版項目5→日本語版項目2, 原版項目6→日本語版項目5, 原版項目7→日本語版項目8, 原版報告8→日本語版項目11, 自己愛傾向: 原版項目9→日本語版項目3, 原版項目10→日本語版項目6, 原版項目11→日本語版項目9, 原版項目12→日本語版項目12)。

因子は3つで、優越感・有能感、注目・賞賛欲求、自己主張性のそれぞれが10項目で構成される。「1. 全く当てはまらない」から「5. とてもよく当てはまる」までの5件法で回答が求められた。本研究における内的整合性は以下の通りであった： $\alpha=.91$ (NPI-S総合得点), $\alpha=.88$ (優越感・有能感), $\alpha=.89$ (注目・賞賛欲求), $\alpha=.80$ (自己主張性)。

The Japanese Version of Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) DTDD-Jの併存的妥当性を検討するために、ビックファイブ尺度の1つであるTen Item Personality Inventory (TIPI; Gosling, Rentfrow, & Swann, 2003)の日本語版(小塩・阿部・カトローニ, 2012)を使用した。外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の5つの因子それぞれが2項目で構成される。「1. 全く違うと思う」から「7. 強くそう思う」までの7件法で回答が求められた。本研究における項目間の相関は以下の通りであった： $r=-.55$ (外向性), $r=-.20$ (協調性), $r=-.40$ (勤勉性), $r=-.25$ (神経症傾向), $r=-.47$ (開放性)。

結果と考察

モデルの検討

DTDD-Jの12項目で確認的因子分析を実施し³⁾、1因子モデル、3因子間相関モデル、階層因子分析モデルの適合度を比較した。その結果、1因子モデルの適合度指標は $\chi^2=262.056$, $df=54$, $p<.001$, $CFI=.737$, $RMSEA=.126$, $CI=.111-.141$, $AIC=8381.210$ であった(Figure 1-A)。3因子間相関モデルの適合度指標は $\chi^2=112.270$, $df=51$, $p<.001$, $CFI=.922$, $RMSEA=.070$, $CI=$

3) 探索的因子分析(主因子法, プロマックス回転)を実施した結果, 3因子構造が見られた。ただし, 2項目(項目2および項目11)については全体的に負荷量が低く, いずれの因子に属するかが明確ではなかった。本研究では探索的因子分析の結果を参考にしつつも項目の意味内容を考慮し, 確認的因子分析の結果を記載した。

.053-.088, $AIC=8237.424$ であった(Figure 1-B)。階層因子分析モデルの適合度指標は $\chi^2=67.825$, $df=39$, $p<.01$, $CFI=.963$, $RMSEA=.055$, $CI=.032-.077$, $AIC=8216.979$ であった(Figure 1-C)。したがって, 階層因子分析モデルの適合度が最も高いことが示された。この結果は原版のDTDDと一致し, DTは個別の概念としてのみではなく, 1つの総合的な概念として測定するという見解を支持する。

DTDD-Jの特徴と性差の検討

DTDD-Jの総合得点と各下位尺度得点の代表値, および相関係数を算出した(Table 1)。すべての得点で歪度, 尖度ともに絶対値1を超える値はないことが確認された。また, DTDD-Jの総合得点とすべての下位尺度との間に高い相関関係が認められた。下位尺度間の関連では, マキャベリアニズムはサイコパシー傾向, 自己愛傾向の双方と中程度の正の相関を示した。これらの相関係数は原版と同程度の値であった。サイコパシー傾向と自己愛傾向の相関は $r=.18$ ($95\%CI^4$)= $.05, .30$)と, 原版($r=.31$, $95\%CI=.23, .39$)と比較して低い値であった。しかし, 信頼区間について比較したところ, 本研究の結果と原版で十分な重なりが認められるため, 大きな問題ではないと判断される。

性別による得点差を検討するために, DTDD-Jの総合得点および各下位尺度得点について t 検討を行った(Table 2)。その結果, マキャベリアニズム($t=1.49$, $df=237$, $n.s.$)を除くすべての得点で, 女性よりも男性の得点の方が有意に高かった。先行研究ではマキャベリアニズムにおける得点の性差には議論が残されており, 原版でも有意な結果は得られていない(Jonason, Li, & Buss, 2010; Jonason & Webster, 2010)。したがって, マキャベリアニズムで有意差が認められなかった点

4) $95\%CI$ (Confidence Interval ; 95%信頼区間)について引用文献に記載されていない場合はN数と相関係数から算出した。

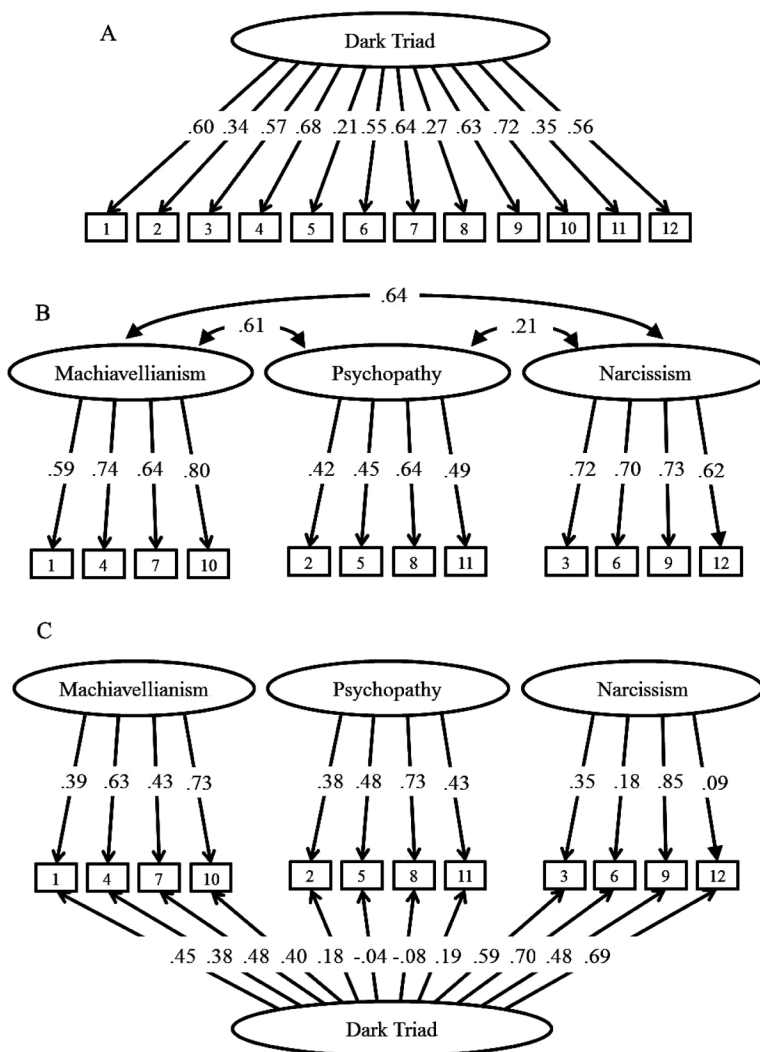


Figure 1 One-dimensional (A), three-dimensional (B), and hierarchical (C) confirmatory factor analyses of the Dark Triad Dirty Dozen-Japanese Version

Table 1 Descriptive statistics and correlations among components of the Dark Triad Dirty Dozen-Japanese Version

	M	SE	95%CI		SD	Sk	Kw	Pearson correlation coefficient		
			Lower	Upper				Machiavellianism	Psychopathy	Narcissism
Dark Triad	34.20	.49	33.24	35.16	7.63	.25	-.11	.87**	.65**	.77**
Machiavellianism	10.69	.23	10.25	11.15	3.57	.30	-.37	—	.42**	.54**
Psychopathy	10.14	.18	9.80	10.51	2.83	.40	.20	—	—	.18**
Narcissism	13.32	.22	12.91	13.79	3.51	-.13	-.31	—	—	—

Note. CI=Confidence Interval, Sk=Skewness, Kw=Kurtosis.

** $p < .01$

Table 2 Sex differences among components of the Dark Triad Dirty Dozen-Japanese Version

	Women		Men		<i>t</i>	95%CI		Cohen's <i>d</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		Lower	Upper	
Dark Triad	33.40	7.44	35.73	7.57	2.29*	.33	4.34	0.31
Machiavellianism	10.49	3.45	11.20	3.62	1.49	-.23	1.65	0.20
Psychopathy	9.87	2.70	10.64	2.81	2.08*	.04	1.51	0.28
Narcissism	12.96	3.33	13.89	3.64	2.01*	.02	1.86	0.27

Note. CI=Confidence Interval.

* $p < .05$

Table 3 Correlations among the Dark Triad Dirty Dozen-Japanese Version and other measures

	DTDD-J			
	Machiavellianism	Psychopathy	Narcissism	Total
MACH-IV	.42**	.36**	.24**	.44**
LSRP	.61**	.46**	.38**	.61**
NPI-S	.30**	-.06	.63**	.41**
TIPI-J				
Extraversion	-.01 (-.01)	-.13 (-.21)	.19** (.26)	.04 (.05)
Agreeableness	-.31** (-.61)	-.35** (-.81)	-.11 (-.22)	-.33** (-.63)
Conscientiousness	-.05 (-.08)	-.17* (-.30)	.08 (.11)	-.05 (-.07)
Neuroticism	.04 (.07)	.01 (.02)	.06 (.10)	.06 (.11)
Openness	-.02 (-.03)	-.02 (-.03)	.15* (.22)	.05 (.07)

Note. DTDD-J=Dark Triad Dirty Dozens-Japanese Version, LSRP=Levenson Self-Report Psychopathy Scale, NPI-S=Narcissistic Personality Inventory-Short Version, TIPI-J=Ten-Item Personality Inventory-Japanese Version. Parenthetic correlations are corrected for attenuation from measurement error of TIPI-J.

* $p < .05$, ** $p < .01$

も含めて、原版の結果を再現したといえるだろう。

信頼性の検討

DTDD-Jの総合得点および各下位尺度について α 係数を算出した。その結果、サイコパシー傾向を除くすべての得点で、十分な内的妥当性が示された(DTDD-J総合得点=.81, マキャベリアニズム=.78, サイコパシー傾向=.55, 自己愛傾向=.79)。原版のサイコパシー傾向の α 係数は=.77であり、日本語版のサイコパシー傾向の α 係数は原版の値と比較しても低い値であった。そのため、原版項目と邦訳項目の等価性が低かった可能性があるだろう。また、本研究では信頼性の判断材料として α 係数のみを用いたという限界点もある。今後の研究では縦断調査によって再検査信

頼性を測定し、サイコパシー傾向の信頼性について異なる観点からの検討が必要だろう。その他の下位尺度および総合得点についての内的整合性は十分に得られたと判断できる。

併存的妥当性・弁別的妥当性の検討

DTDD-Jの総合得点および下位尺度の得点について、既存の3種類のDT尺度、TIPI-Jとの積率相関係数を算出した(Table 3)。その結果、DTDD-Jの各下位特性に対応する既存のDT尺度との間に有意な相関関係が認められた。ただし、DTDD-Jのサイコパシー傾向とLSRPの関連($r=.46, 95\%CI=.35, .56$)はDTDD-JのマキャベリアニズムとLSRPの関連($r=.61, 95\%CI=.52, .68$)よりも弱かった。その要因として、想定していたサイコパシー傾向の妥当性を検討した尺度

の違いが考えられる。しかし、原版で用いられたサイコパシー傾向を測定する既存の尺度でも、DTDDのサイコパシー傾向 ($r=.42, 95\%CI=.32, .51$), マキャベリアニズム ($r=.44, 95\%CI=.34, .53$) の双方と同程度の相関係数が報告されている。この点を考慮すると、本研究で得られたDTDD-JのマキャベリアニズムとLSRPの相関関係も解釈可能な結果であるだろう。また、既存のDT尺度について、サイコパシー傾向を測定するLSRPは一次性サイコパシーと二次性サイコパシーという下位因子が存在し、自己愛傾向を測定するNPI-Sは優越感・有能感, 注目・賞賛欲求, 自己主張性という下位因子が存在する。Appendix 1に示すように、DTDD-Jのサイコパシー傾向はLSRPのいずれの下位因子とも正の相関を示し、DTDD-Jの自己愛傾向はNPI-Sのいずれの下位因子とも正の相関を示した。DTDDのような少数項目で構成される尺度の場合には、少数項目数で広い概念範囲をどこまで測定することができているかを検討することが重要になる。本研究の結果から、DTDD-Jは各特性の概念構造を十分に捉えられていると判断される。

また、DTDD-Jの総合得点、マキャベリアニズム、サイコパシー傾向はTIPI-Jの協調性と有意な負の相関を示したが、DTDD-Jの自己愛傾向と協調性の相関は有意ではなかった ($r=-.11, 95\%CI=-.24, .02$)。しかし、原版で報告されている自己愛傾向と協調性の相関は $r=-.17$ ($95\%CI=-.29, -.05$) で、日本語版と原版で信頼区間の重なりは大きい。さらに、TIPIは尺度の構造的に内的整合性が低いとため、相関の希薄化を修正してDTDD-Jの自己愛傾向とTIPI-Jの協調性の関連を再検討した結果、有意な負の相関関係が示された ($r=-.22, 95\%CI=-.34, -.09$)。したがって、自己愛傾向と協調性の関連は他の得点と比較するとやや弱かったが、原版には矛盾しない結果であった。また、先行研究ではDTを包括的な概念として扱ったほうが協調性との関連がより顕著になる

ことが報告されており (e.g., Jakobwitz & Egan, 2006), 本研究でもDTDD-Jの総合得点は協調性と十分な相関を示した。しかし、DTの基盤については議論が分かれており、協調性以外の要因として、共感性の欠如や、攻撃性、短期的な対人方略等が挙げられている (e.g., Furnham et al., 2013)。今後は上記の指標についても検討し、DTという包括的な概念をより明瞭にする必要があるだろう。

さらに、DTDD-Jの自己愛傾向はTIPI-Jの外向性 ($r=.19, 95\%CI=.06, .31$) および開放性 ($r=.15, 95\%CI=.02, .28$) と正の相関を示した。外向性、開放性ともに原版でも相関の希薄化を修正した値では有意な正の相関が得られており (外向性: $r=.15, 95\%CI=.03, .27$, 開放性: $r=.23, 95\%CI=.11, .35$), これらは先行研究の知見を支持する結果であった。勤勉性については、DTDD-Jのサイコパシー傾向は負の相関を示したが ($r=-.17, 95\%CI=-.30, -.04$), マキャベリアニズムでは認められなかった ($r=-.05, 95\%CI=-.18, .08$)。これに対して、原版ではサイコパシー傾向ではなく ($r=-.09, 95\%CI=-.21, .04$), マキャベリアニズムで勤勉性と相関が認められている ($r=-.20, 95\%CI=-.32, -.08$)。しかし、サイコパシー傾向と勤勉性の関連は多くの研究で報告されているため (e.g., Paulhus & Williams, 2002; Lynam, Caspi, Moffitt, Raine, Loeber, & Stouthamer-Loeber, 2005), 想定された仮説とは異なるが、これまでの知見には矛盾しない結果であった。また、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向の弁別的妥当性の論拠として、神経症傾向との関連に差異が認められると予想したが、神経症傾向はDTDD-Jのいずれの得点とも関連しなかった。この点について、原版ではTIPIの神経症傾向とDTDDのマキャベリアニズムとの間に負の関連が得られている。その一方で、マキャベリアニズムとネガティブな感情の経験との間に正の関連が認められることを報告する研究もある (McHoskey et al., 1998;

Vernon et al., 2008)。したがって、DTに関する研究では、必ずしも各特性に関する理論的知見を完全に反映した結果が報告されているわけではないと考えられる。本研究では既存のDT尺度とビッグファイブ尺度のみを妥当性の検討に用いることに留まった。そこで、今後はDTの反社会性や外在化問題を反映した指標との検討が必要であるだろう。例えば、マキャベリアニズムは危険に対する反応として攻撃する受動的攻撃性と関連するのに対し、サイコパシー傾向は目的のために攻撃性を用いる能動的攻撃性と関連する (Cima & Raine, 2009)。このような外在指標を用いることで、DTDD-Jの妥当性だけでなく、一般人口におけるDTの反社会性を明らかにすることも可能である。また、DTは反社会的なパーソナリティとされる一方で、進化的に優れた社会的方略を有する可能性も指摘されている (Jonason et al., 2009)。今後はこのようなDTの適応的な側面も明らかにしていく必要がある。それによって、犯罪のような反社会性が注目されることの多いDTについて、新しい観点からの知見を提供することが期待される。

結 論

本研究の目的は、DTDDの日本語版であるDTDD-Jを作成し、信頼性と妥当性を検討することであった。DTDD-Jの因子構造を明らかにするために複数の因子モデルを比較した結果、マキャベリアニズム、サイコパシー傾向、自己愛傾向による3つの下位因子が1つの高次因子に集約されるという、階層因子モデルの適合度が最も高いことが示された。また、DTDD-Jの内的整合性はサイコパシー傾向で低いものの、その他の得点では十分な値を示した。妥当性の検討については、DTDD-Jの3つの下位特性は対応する既存の各DT尺度に共通した要素を概ね測定することが示された。DTDD-Jが12項目で構成される簡便な尺度であり、先行研究と同様の因子構造、および

一定の信頼性と妥当性が得られたことから、DTDD-JはDTの各特性を個別に測定する場合、DTを1つの概念として測定する場合の双方で有益な尺度であると考えられる。

今後の課題として、本研究では、内的整合性のみを信頼性の判断材料として用いたという限界点があったため、再検査信頼性についても検討する必要がある。加えて、本研究では、マキャベリアニズムとサイコパシー傾向の弁別性にも課題が残された。そのため、両特性の違いがより顕著に示されると考えられる指標との関連を検討することで、妥当性の論拠を補う必要があるだろう。

引用文献

- Christie, R., & Geis, F. (1970). *Studies in Machiavellianism*. New York: Academic Press.
- Cima, M., & Raine, A. (2009). Distinct characteristics of psychopathy relate to different subtypes of aggression. *Personality and Individual Differences*, *47*, 835–840.
- Decety, J., Chen, C., Harenski, C., & Kiehl, K. A. (2013). An fMRI study of affective perspective taking in individuals with psychopathy: Imagining another in pain does not evoke empathy. *Frontiers in Human Neuroscience*, *7*, 489.
- Furnham, A., Richards, S. C., & Paulhus, D. L. (2013). The dark triad of personality: A 10 year review. *Social and Personality Psychology Compass*, *7*, 199–216.
- Gosling, S. D., Rentfrow, P. J., & Swann, W. B., Jr. (2003). A very brief measure of the Big-Five personality domains. *Journal of Research in Personality*, *37*, 504–528.
- Hare, R. D. (2003). *Manual for the revised psychopathy checklist*. 2nd ed. Toronto: Multi-Health Systems.
- Jakobowitz, S., & Egan, V. (2006). The dark triad and normal personality traits. *Personality and Individual Differences*, *2*, 331–339.
- Jankowiak-Siuda, K., & Zajkowski, W. (2013). A neural model of mechanisms of empathy deficits in narcissism. *Medical Science Monitor*, *19*, 934–941.
- Jonason, P. K., Li, N. P., & Buss, D. M. (2010). The costs and benefits of the Dark Triad: Implications for mate poaching and mate retention tactics. *Personality and*

- Individual Differences*, **48**, 373–378.
- Jonason, P. K., Li, N. P., Webster, G. W., & Schmitt, D. P. (2009). The Dark Triad: Facilitating short-term mating in men. *European Journal of Personality*, **23**, 5–18.
- Jonason, P. K., Luevano, V. X., & Adams, H. M. (2012). How the Dark Triad traits predict relationship choices. *Personality and Individual Differences*, **53**, 180–184.
- Jonason, P. K., & Webster, G. D. (2010). The Dirty Dozen: A concise measure of the Dark Triad. *Psychological Assessment*, **22**, 420–432.
- Levenson, M. R., Kiehl, K. A., & Fitzpatrick, C. M. (1995). Assessing psychopathic attributes in a noninstitutionalised population. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 151–158.
- Lilienfeld, S. O., & Andrews, B. P. (1996). Development and preliminary validation of a self-report measure of psychopathic personality traits in noncriminal populations. *Journal of Personality Assessment*, **66**, 488–524.
- Lynam, D. R., Caspi, A., Moffitt, T. E., Raine, A., Loeber, R., & Stouthamer-Loeber, M. (2005). Adolescent psychopathy and the Big Five: Results from two samples. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **33**, 431–443.
- McHoskey, J. W., Worzel, W., & Szyarto, C. (1998). Machiavellianism and psychopathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 192–210.
- 中村敏健・平石 界・小田 亮・齋藤慈子・坂口菊恵・五百部裕・清成透子・武田美亜・長谷川寿一 (2012). マキャベリアニズム尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **20**, 233–235.
- O’Boyle, E. H., Jr., Forsyth, D. R., Banks, G. C., & McDaniel, M. A. (2012). A meta-analysis of the Dark Triad and work behavior: A social exchange perspective. *Journal of Applied Psychology*, **97**, 557–579.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1–11.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, **21**, 40–52.
- 大隅尚広・金山範明・杉浦義典・大平英樹 (2007). 日本語版一次性・二次性サイコパシー尺度の信頼性と妥当性の検討 パーソナリティ研究, **16**, 117–120.
- Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002). The Dark Triad of personality: Narcissism, Machiavellianism and psychopathy. *Journal of Research in Personality*, **36**, 556–563.
- Raskin, R., & Hall, T. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Saucier, G. D. (1994). Mini-markers: A brief version of Goldberg’s unipolar Big-Five Markers. *Journal of Personality Assessment*, **63**, 506–516.
- 杉浦義典・佐藤 徳 (2005). 日本語版 Primary and Secondary Psychopathy Scale の妥当性 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, 407.
- Verbeke, W. J. M. I., Rietdijk, W. J. R., van den Berg, W. E., Dietvorst, R. C., Worm, L., & Bagozzi, R. P. (2011). The making of the Machiavellian brain: A structural MRI analysis. *Journal of Neuroscience, Psychology, and Economics*, **4**, 205–216.
- Vernon, P. A., Villani, V. C., Vickers, L. C., & Harris, J. A. (2008). A behavioral genetic investigation of the Dark Triad and the Big 5. *Personality and Individual Differences*, **44**, 445–452.

Appendix 1 Correlations among the DTDD-J and original measures of the Dark Triad

	DTDD-J			
	Machiavellianism	Psychopathy	Narcissism	Total
MACH-IV	.42**	.36**	.24**	.44**
LSRP	.61**	.46**	.38**	.61**
primary psychopathy	.61**	.40**	.39**	.61**
secondary psychopathy	.30**	.32**	.17**	.32**
NPI-S	.30**	-.06	.63**	.41**
a sense of superiority and competence	.19**	-.10	.39**	.24**
a need for attention and praise	.30**	-.02	.77**	.48**
self-assertion	.22**	.00	.28**	.23**

** $p < .01$

Note. DTDD-J=Dark Triad Dirty Dozens-Japanese Version, LSRP=Levenson Self-Report Psychopathy Scale, NPI-S=Narcissistic Personality Inventory-Short Version.

Appendix 2 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J)

- 以下の項目は、あなたにどの程度あてはまりますか。
1～5のうち、最も近いと思うものをひとつだけ選んで、数字を○で囲んでください。
- | | | | |
|---|---|-----|--------------------------------------|
| | 全
く
あ
て
は
ま
ら
な
い | | 非
常
に
あ
て
は
ま
る |
| 1. 私には他の人をあやつっても自分の思い通りにするところがある …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 2. 私は、あまり自分のあやまちを認めることがない …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 3. 私は、他の人から立派な人物だと思われたい מאוד …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 4. 私には他の人をだましたり嘘をついても自分の思い通りにするところがある …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 5. 私は、自分の行動の善悪にはあまり関心がない …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 6. 私は、他の人から注目してほしいと思いがちだ …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 7. 私には他の人にお世辞を言っても自分の思い通りにするところがある …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 8. 私は、どちらかというと冷淡で人の気持ちを気にしない …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 9. 私は、高い身分や名声を手に入れたと思いがちだ …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 10. 私には自分の目的のために他の人を利用するところがある …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 11. 私は、どちらかというと疑い深くひねくれた人間である …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |
| 12. 私は、他の人からの特別な好意を期待しがちだ …………… | 1 | — 2 | — 3 — 4 — 5 |

Development, Reliability, and Validity of the Japanese Version of the Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J)

Ayame TAMURA¹, Atsushi OSHIO², Keisuke TANAKA³,
Keita MASUI^{4,5} and Peter K. JONASON⁶

¹ Hiroshima University

² Waseda University

³ Hyogo University of Teacher Education

⁴ Keio University

⁵ Japan Society for the Promotion of Science

⁶ University of Western Sydney

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2015, Vol. 24 No. 1, 26-37

The Dark Triad (DT) is a constellation of three socially undesirable personality traits: Machiavellianism, psychopathy, and narcissism. This study developed a Japanese version of the Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J) which used a self-report measure of the DT, and examined its reliability and validity. Undergraduate students ($N=246$) completed the DTDD-J, three measures of each DT personality trait, and the Big-Five Scale. Hierarchical confirmatory factor analysis indicated that the DTDD-J had three group factors corresponding to each DT personality trait, and one general factor of comprehensive DT. Internal consistencies of the DTDD-J were high, except for psychopathy. Concurrent validity and discriminant validity of the DTDD-J were almost consistent with previous research. Although there are remaining issues, the results generally support the reliability and validity of the DTDD-J.

Key words: Dark Triad, Machiavellianism, psychopathy, narcissism, scale development, DTDD-J